

古典派経済理論の復活と均衡分析

— スラッファ理論の方法論的意義 —

Resumption of Classical Political Economy and Equilibrium Theory
— Methodological Implication of Sraffa's Theory —

菱 山 泉

Izumi Hishiyama

1. マーシャルの均衡分析

均衡の概念は、いわゆる新古典派理論における核心を占めてきた。F.H. ハーンは、ケンブリッジの教授就任講義¹⁾に、この均衡というトピックを選んだけれども、ハーンの言う「均衡」は、それがかつて持っていた活力をすでに失っており、デリケートかつ sophisticated ではあるが、モデル構築に必要なフィクションに変化しているようにみえる。

ケインズとともに、いやケインズにさきがけて、新古典派理論の批判に携わったスラッファは、その理論上の初期の著作²⁾から一貫して、マーシャルの「需要と供給の均衡」(the equilibrium of demand and supply) に、攻撃の的を定めている。スラッファの『商品による商品の生産——経済理論批判序説』(P.Sraffa, *Production of Commodities by Means of Commodities: Prelude to a Critique of Economic Theory*, Cambridge, 1960)³⁾が、現代経済学における不可欠の一環を成す以上、マーシャルの均衡概念の吟味から始めたとしても、アナクロニズムのそしりを受けることはないだろう。

周知のように、マーシャルは均衡の取り扱いに頗る慎重であった。かれは、生物学的均衡と力学的均衡とを対置する。経済学研究のより高次の段階になると、生物学的均衡がもっぱら問題になるという。人間や企業の生長と衰退のライフ・サイクルに見られる、「生命と凋落のつり合いのないしは均衡」が、そのエッセンスである。研究のより低次の単純な段階では、力学的均衡が問題になる。その経済的表現は、いうまでもなく、「需要と供給の均衡」である。マーシャルに従うと、この種の均衡概念も、生活の実態から離れないように、ごく控え目に使いこなさなければならない。この用具の有効性は、マーシャルによると、そう優れたものでもない。とはいえ、商品(財もしくは要素)の需要曲線と供給曲線の交点によって、その商品の均衡価格と均衡数量とが決定するという、価値と分配にかんする初歩的な命題が、この力学的均衡の所産であることは紛れもない事実である。

それにもまして、マーシャルの「需要と供給の均衡」理論は、ジェヴォンズの効用説とリカードの生産費説の価値論における対立を調整しうる唯一の概念的枠組みを与えると考えられた⁴⁾から、マーシャルには、ほぼ1世紀にわたる価値論争にケリをつけたという自負心があっ

たに違いない。

いずれにせよ、このような理論がマーシャル経済学の「基本的原理」(Fundamental Idea)の一つであることは、間違いないであろう。この意味で、マーシャルは次のように述べている。「需要と供給の均衡の一般理論は、分配と交換という中心問題の多様な部分のすべてにわたって共通する一つの基本的原理である」(A. Marshall, *Principles of Economics*, 1st ed., 1890, 永澤越郎訳、マーシャル『経済学原理』I、初版序文5ページ)。

もう少し立ち入って、マーシャルの均衡のインプリケーションを調べてみよう。まず初めに、需要と供給の均衡には、商品の消費から得られる満足ないし効用と、それを生産するために費やされた努力ないし犠牲のバランスという、消費者の効用と生産者の不効用の主体的な緊張関係が隠されている。次に、こうした均衡には、生産者(売手)と消費者(買手)の双方が容認しようとする価格で、当該商品が生産・販売・消費されるという意味で、均衡価格とは市場にある商品を clear する価格だという客観的な意味が込められている。

均衡化の過程が考察されているのは、いうまでもなく市場においてである。「取引の双方の側には、緊密な結合が存在しない。……買手は、買手同志で……売手は、売手同志で自由に競争する。……すべての人々は、独自に行動はするが、他の人々が行っていることについて十分な知識を持っており、一般に他の人々よりも低い価格を受け入れたり、高い価格を支払ったりすることがない」(前掲永澤訳、Ⅲ、341ページ)。引用文の最後にある文脈は、たんに財の価格ばかりでなく、生産要素の価格、例えば労働の取引で交渉される賃金にも当てはまると解すべきであろう。ともあれ、ワルラスのいう「競り上げ競り下げ」の仕掛けが、マーシャルの市場においても、なんの妨げもなくはたらくと解することもできるし、いわゆる一物一価の想定、マーシャル自身の言葉で言えば「同一の場所、同一の時期において、市場はたった一つの価格で取引が行われるものという想定」(永澤訳、Ⅲ、341ページ)を、同等の他の取引者の行動と取引対象の価格情報とに明るいマーシャルの個人が、背後から支えていると解してもよいだろう。

2. スラッファ体系の決定の仕組み

これまでマーシャルの考え方に即して、その約衡の概念を調べてきたけれども、マーシャルには、ここで暫く休憩してもらい、このドラマのシテであるスラッファの『商品による商品の生産』(以下『商品の生産』と略称する)の理論に移ることにしよう。この理論で扱われた主要なテーマの一つは、体系を構成するすべての商品の価格決定である。こういう意味で、考えられた体系が「完結する」(determinate)かどうか——これが主要論点の一つである。

マーシャルのように、現実に対する第一次の接近という手順をふんで、特定の商品ないし一産業を他から切り離して考察するという、かれに固有の手法を別にすれば、考察された体系の完結性という論題にかんしては、スラッファとマーシャルには重なり合う面があると言えるかも知れない。重なり合う面で、いかに両者が深く異なっているかを明らかにするのが、ある意味で、本稿のネライの一つなのである。

R.F. ハロッドは、スラッファの『商品の生産』の書評(*Economic Journal*, Vol. LXXI, Dec., 1961, p. 783)で、この本の索引には「需要」("demand")という言葉が出てこないと指摘し、「最終需要に関わりのない価格決定の体系を求め得るとするのは、驚くべきことだ」と

述べている。なるほど「需要」もそうだが、この本の索引には、「均衡」(“equilibrium”)という言葉も現われない。このこともまた驚きと言わねばならないけれども、スラッファが均衡の概念を注意ぶかく避けているのは、この概念には、マーシャルの「需要と供給の均衡」が染み込んでいるから、その用語を不用意に使うと、自らの価格決定の体系をばマーシャルのそれと類似したものと誤解される危惧があったからだろう。

ともあれ、スラッファはその著作のなかで、「体系の決定」(the determination of the system)に留意し、考察された体系が完結するか、それとも完結しないか(determinate or indeterminate)を問題にする。スラッファにとって、体系が決定ないし完結するというのは、独立の生産方程式(商品ないし産業の生産過程を表示する)から成るモデル(スラッファはこれを「現実の経済体系」と呼ぶ)に基づいて、一意的な交換価値ないし価格の組み合わせ(集合)が決定することにほかならない。

いま、このことを例証するために、全産業にとって均一の利潤率 r をオープン・エンドとする、スラッファの自由度1のモデルを取り上げてみよう。簡単にするために2商品・2産業の小型のモデルを次のように示すことにしよう。

$$\begin{aligned} (A_{11}P_1 + A_{21}P_2)(1+r) + L_1w &= A_1P_1 \\ (A_{12}P_1 + A_{22}P_2)(1+r) + L_2w &= A_2P_2 \end{aligned} \quad (1)$$

このモデルにおいて、商品1の年々の産出量を A_1 とよび、商品2の年々の産出量を A_2 とよぶことにする。また A_1 を生産する産業において、年々、投入される商品1と2の数量を A_{11} 、 A_{21} とし、 A_2 を生産するために投入されるこれらに対応する数量を A_{12} 、 A_{22} としよう。一般に、 A_{ij} は、 j 商品の生産に投入される i 商品の数量を表わす。これらすべての数量、すなわち諸産出量と、それらの生産に使われる諸投入量とは、既知数をあらわしている。 L_1 、 L_2 は、それぞれ商品1と2を生産するために投入された労働量を表わすものとし、 w を労働1単位あたりの賃金とよぶ。労働の投入量 L_1 、 L_2 も、商品の投入量と同じように既知数を表わす。 P_1 、 P_2 は、それぞれ、商品1と2の価格をあらわすけれども、これらの価格は、賃金とともに、任意に選択された価値の標準(単一の商品もしくは合成商品)のタームで表現された未知数を表わす。

いうまでもないが、このモデルを構成する各生産方程式の左辺に表示された諸商品ないし諸生産手段の投入量と労働の投入量とは、それぞれの商品生産に採用されたテクノロジーをあらわしている。スラッファは、これを「生産的消費の方法」あるいは簡潔に、「生産方法」と呼んでいる。要するに、それぞれの商品の生産方程式は、それぞれの商品の生産に採用された「生産方法」すなわちテクノロジーを表わすばかりでなく、モデル(1)のように、それぞれの生産方程式から成る体系全体の「生産方法」ないしテクノロジーをも表わすのである。

さて本筋に立ちかえるとして、モデル(1)に表示された体系の決定にかんする仕組みを考えてみよう。まずスラッファにならぬ、均一の利潤率 r を独立変数に選ぶことにする。いま、商品1を価値の標準として選択($P_1 = 1$)し、そのタームで価格(P_2)と賃金(w)を表現すると、決定されるべき未知数は、3コ(商品2の価格 P_2 、賃金 w および利潤率 r)であるから、方程式の数を1コだけ超過する。だから、このモデルは、自由度1の体系である。そこで、独立変数として選ばれた均一の利潤率 r が、このモデルにとって外生的な要因によって決定され

る⁵⁾ものとするれば、価格 P_2 と賃金 w が確定するであろう。かくて、「体系の決定」ないし「体系の完結」とスラッファが呼ぶのは、ある意味で、「一意的な交換価値の組み合わせ（集合）」(a unique set of exchange-values) が決定されることにはかならない。

3. スラッファ理論と均衡理論

ワルラスは、その『純粹経済学要論』第4版(1900)の序文⁶⁾のなかで、「純粹経済学は、本質的に、絶対的な自由競争という仮設的な制度の下における価格決定の理論である」(力点は引用者)と述べている。すなわち、ワルラスのこの本に託した主題は、そのいわゆる一般均衡モデルに基づいて、(消費財・資本財・生産用役にかんする)一意的な交換価値の組み合わせ、あるいはより厳密に言えば、一意的な交換価値と取引数量の組み合わせの決定の仕組みを明らかにすること、である。かくて、一意的な価格集合の存在を解明するという点で、マーシャルやワルラスの均衡理論とスラッファの『商品の生産』の理論とが重なり合う面があると言えるかもしれない。なるほど、ある考えられた体系に、一意的な価格集合が存在するという点に限って言えば、かような均衡理論とスラッファ理論とが、形式的に類似している面がないわけではないが、それぞれの理論における決定の仕組みに立ち入ると、二つの理論の違いが歴然としてくるように思われる。こうした点を考察するいとぐちとして、岩波の『経済学辞典』第2版⁷⁾の項目「均衡理論」の一文を引用してみよう。

部分均衡理論においては単一の財の市場だけが問題にされたが、一般的均衡理論においては多数の財(一般には n 種類)の市場の同時的均衡を問題にする。ある特定の財に対する需要量・供給量はその財の価格だけでなく他の財の価格にも依存する。……具体的には、コーヒーの価格が上昇すれば砂糖に対する需要は減少し、逆の場合は逆であろう。この種の関係を通じて多くの財の市場は相互に関連し、どの財の価格もその市場内だけでは決まらず、他の市場との関係において決まり、均衡価格・均衡取引量などの概念もすべての財を同時に考えて初めて意味があるものとなる。一般的均衡理論はこの事実を強調し、多数の財の価格の同時決定を問題にする(前掲書247ページ、力点は引用者)。

この文中、コーヒーと砂糖の例は「補完」をあらわすけれども、魚肉と鶏肉のように「代替」をあらわす例も、数多く考えられよう。それに生産物ばかりでなく、生産用役についても、「代替」と「補完」の関係を考え得ることは言うまでもない。このように、広い意味での財相互の連関は、そうした財を使用するuserの胸に刻まれた選好表を基礎とするものである。こういう意味で、一般均衡理論においては諸市場の間の相互依存関係が仮定されるのである。つまり、そうした財(または用役)を使用する個人個人の選好に基づく主体的な(subjective)観点から、多数の財(または用役)、ないしはそれらの市場が、相互に関連づけられるのである。

たとえ一意的な商品の諸価格の決定ないしそれらの同時決定が、ワルラスの均衡理論に似ていると言っても、それは所詮、見かけだけに過ぎない。スラッファ理論においては、商品の市場ではなく、商品の生産が第一義的に問題なのである。ワルラスのように、諸財の市場の連関ではなく、諸商品の生産の連関、すなわち小麦の生産に鉄が投入され、鉄の生産に小麦が投入

されるという、諸商品の生産の間の投入と産出の技術的な連関、ある時点（ある期間）に所与のテクノロジーに制約された、すぐれて客観的な（objective）、生産ないし再生産の構造が、スラフファ理論の基底にあるのだ。そこで、上の引用文中の力点を付した文脈になぞらえて述べてみると、こうした網の目のような技術的な連関を通じて、多くの商品の生産は相互に関連し、どの商品の価格もその生産内だけでは決まらず、他の商品の生産との関係において決まるのである。

連立式モデル(1)を例にとり、その商品1を小麦とよび、商品2を鉄とよぶとすれば、小麦の価格 P_1 は、小麦の生産（ないし生産方程式）だけでは決まらない。鉄の生産（ないし生産方程式）との関係において決まる。というのは、小麦が鉄の生産に投入されるとともに、小麦自体の生産に鉄が投入されるという、小麦と鉄は、それぞれ生産において分離しえない密接な関係にあるからである。いま、スラフファに従って直接ないし間接に、すべての商品の生産に投入される商品を「基礎財」(basics)とよび、体系が n 種類の基礎財（の生産方程式）から構成されているとすれば、ある任意の1商品の価格は、 $(n-1)$ コある、他のすべての商品の生産（ないし生産方程式）との関係で決定すると言わなければならない。

要するに、所与の利潤率に相関的に決まる、スラフファの「一意的な交換価値の組み合わせ（集合）」は、そのモデルを構成する諸商品の、分離しえない、生産方程式の集合、すなわち、それが表示する「生産方法」ないしテクノロジーに現定されて決まるのである。スラフファの小型モデル(1)のどこを見ても、マーシャルやワルラスの需要関数、供給関数、それに超過需要関数などの一かけらも存在しない。このことから明らかのように、スラフファ体系の完結（決定）とともに確定する一意の諸価格の集合は、需給均等という通有の均衡条件（客観的均衡条件と呼ばれることがある）を満たすものではない。したがって、これらの価格は、市場の過不足を一掃するという意味での clear price ではない。またそれらは、消費者の効用と生産者の不効用をバランスさせるとか、交換当事者の選好表にもとづいてパレート最適を満たすとかいう、いかなる主体的な均衡条件をも満たすものでもない。

このように、体系を決定する（完結させる）という点で、見かけは通有の均衡理論に似ているように見えるかもしれないが、スラフファの体系を完結させる「一意的な交換価値の組み合わせ（集合）」は、正統派理論に対する鋭い異端のやいばをふくんでいる。そうしたスラフファの価格集合は、体系の投入側にある前払いされたすべての生産手段の補填を可能にし、利潤を各産業の前払いに比例してそれぞれに均等に配分することを可能にする機能をもっているだけであり、それ以上でもそれ以下でもない。

ここでもう一步ふみ込んで考えてみると、通有の均衡理論とは違い、スラフファ理論は、「循環的過程としての生産」(production as a circular process)の構想——ケネーの『経済表』に具現されている構想——に依拠している。こうした論点を了解するには、スラフファが「生存のための生産」と呼んだ、剰余のない「自己補填の状態」にあるモデルに注目すればよい。ここでも、2商品・2産業から成る小型モデルを次のように表示してみよう。

$$\begin{aligned} A_{11}P_1 + A_{21}P_2 &= A_1P_1 \\ A_{12}P_1 + A_{22}P_2 &= A_2P_2 \end{aligned} \tag{2}$$

ここで、体系が「自己補填の状態」(a self-replacing state)にあると仮定されるから、 A_{11}

$+A_{12}=A_1$, $A_{21}+A_{22}=A_2$ である。商品1と商品2は、年初に生産手段ないし生存手段として、この体系の生産に投入され、生産過程で費消（生産的消費）される。年末にはこれらの商品が、生産的に消費された数量を丁度補填するだけ生産され、各産業の手もとに集積される。すでに述べたように、連立式モデル(2)は、特定の「生産方法」ないしテクノロジーを表わしている。そして、商品1の価格 P_1 と商品2の価格 P_2 は、ここに表示された「生産方法」ないしテクノロジーに直接に規定されて決まる。このようにして決まったどの価格についても、それぞれの生産物の価格が、それらの生産手段の価格に依存するとともに、そうした生産手段の価格が、生産物の価格に依存するという相互規定的な関係が認められる。

要するに、諸商品の年々の再生産を物量の視点から観察すると、生産要素ないし生産用役から消費財へ通ずる一本道という、通有の単線的な生産観とは異なり、モデル(2)に端的に見られるように、諸商品の投入が産出となり、産出が再び投入になるという複線的な「循環過程」(circular process)が浮き彫りになる。他方、価格の視点からみても、すぐ上に述べたように、生産費から生産物の価格へという一面的な関係ではなく、生産手段の価格と生産物の価格との間には、相互現定的な、したがってまた循環的かつ複線的な関係が認められるのである。

やや繰り返しのきらいがあるけれども、通有の均衡理論と違い、スラッファのモデル(2)において確定した「一意的な交換価値の組み合わせ（集合）」は、個人の予想やそれに基づく行動から独立に、この体系に固有の「生産方法」ないしテクノロジーから直接に出てくるものである。そして、「もしそれが市場によって採用されれば、生産物の当初の配分〔生産手段としての各産業への配置〕を復元し、上の過程を〔次年度に〕反復することが可能になるだろう」（第1章、第1節、〔 〕内は引用者）。

かくて、スラッファの体系を完結させる価格の集合は、ある意味で、循環的過程としての生産から直接生まれたものだが、また一方、循環的過程としての生産を可能ならしめる機能をもつと言えよう。いいかえれば、それは、少なくとも今年度と同じ生産過程を、次年度にも繰り返すことを可能にする役割、一言でいえば、体系の再生産を保証する役割を担っている。もう一度いうが、そうした価格集合は、合理的個人の視点から最適性の条件を満たすとか、各市場の財の過不足を消滅させるという意味で clear price を表わすといった、均衡理論に通有の所説とは何の関係もない。

スラッファの体系は、価格決定の理論という面をもつ。ところで、通有の理論、つまり「需要と供給の均衡」の理論によると、部分均衡理論であれ、一般均衡理論であれ、「均衡」において、財（または用役）の均衡価格と均衡取引量（均衡数量）とが同時に決定する。ところが、スラッファが提示したどのモデルをとっても、各商品の生産過程の投入側に現われる商品の数量（投入量）と、その産出側に現われる商品の数量（産出量）とが所与の定数（既知数）であるから、スラッファのいう「体系の決定」とは、通有の現論と違って、もっぱら諸商品の価格と分配変数（利潤率または賃金）の決定に関わっている。

スラッファは、リカードが解決しえずに残した「不変の価値尺度」——スラッファのいわゆる標準商品——の発見のために、一種の物量体系である「標準体系」の構築に携わったけれども、各商品の産出量そのものの決定には少しも立ち入らなかった。けれども、各商品の産出量の決定、すなわち国民所得の商品別構成の決定という問題そのものは現存している。周知のようにW・レオンチェフは、この問題の解決に與った。ともあれ、スラッファのライン、すなわ

ち、古典派経済学者の立場の継承と再建というラインからすれば、産出量の決定は、価格の決定から切り離れた上で、その決定の仕組みを考察するのが妥当であろう。そして、現代経済学が解明したように、価格決定と物量決定という二つの領域は、「双対」の論理によって架橋されるべき問題であろう。⁸⁾

われわれがこれまで論じてきたスラッファ型の「体系の決定」において主役を演じる諸商品の価格とは、古典派のカテゴリーによれば、自然価格ないし生産価格のことにほかならない。したがって、それは、スミス以来、一時的偶発的な要因によって揺れ動く市場価格の「中心価格」(central price)と目されたけれども、市場価格そのものではない。スラッファは、その『商品の生産』において、体系の決定にもっぱら関わる自然価格(生産価格)それ自体と、現実の市場価格との関係、あるいはむしろ、そうした市場価格が、その中心価格である自然価格に自律的に調整される機構をば分折することはなかった。それでは、スラッファのラインに沿って、こうした市場の自律調整機構をいかに取り扱うべきであろうか。⁹⁾こうしたことは、意外なことにまだ十分に解明されていない未解決の問題をなすと言えよう。

注

- (1) F. Hahn, *On the Notion of Equilibrium in Economics*. Cambridge, 1973.
- (2) P. Sraffa, *Sulle relazioni fra costo e quantità prodotta*, *Annali di Economia*, II, 1925.
(菱山泉・田口芳弘訳『スラッファ経済学における古典と近代』有斐閣, 1956所収).
- (3) スラッファ『商品による商品の生産—経済理論批判序説』(菱山泉・山下博訳, 有斐閣, 1962).
- (4) J.K. Whitaker(ed), *The Early Economic Writings of Alfred Marshall, 1867-1890*, Vol. I, pp. 97-98 をみよ。なお次の論稿をも参照。菱山泉, エコン寺巡礼④—アルフレッド・マーシャル, 「経済セミナー」, 1987年8月号, 85-86ページ。
- (5) スラッファは、最終的に、利潤率を独立変数として選んでいるけれども、それが価格が確定される前に先決されることについて、次の一文を録している。「それ〔利潤率のこと、引用者〕は、先産体系の外部から、とくに貨幣利率の水準によって、決定されることが可能である」(菱山・山下訳, 57ページ)。
- (6) Léon Walras, *Éléments d'économie politique pure ou Théorie de la richesse sociale*, Paris et Lausanne, 1926. 久武雅夫訳, レオン・ワルラス『純粋経済学要論—社会的富の理論』, 岩波書店, 1983, 「第4版への序文」Xページ。
- (7) 大阪市立大学経済研究所編『経済学辞典』第2版, 岩波書店, 1979.
- (8) 現代ケンブリッジ学派のバシネッティの次の著作は、ある意味で、このような問題意識の産物であるように思われる。L.L. Pasinetti, *Lectures on the Theory of Production*, 1977. 菱山泉ほか訳. ルイジ・L・バシネッティ『生産理論』, 東洋経済新報社, 1979.
- (9) こうした論点について、次の論稿が参照されるべきであろう。小島専孝「スラッファのハイエク批判について」, 京都学園大学論集, 第16巻第3号, 1987年12月; 同「スラッファのハイエク批判と『一般理論』」, 同論集, 第16巻4号, 1988年3月。なお、次の拙稿を参照されたい。菱山泉, エコン寺巡礼⑩—P. スラッファ(続々), 「経済セミナー」1988年4月号, 117-122ページ。